

☆主の昇天(5月24日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

**第一朗読 (使徒たちの宣教 1章1～11節)**

テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」

さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。

イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

**第二朗読 (使徒パウロのエフェソの教会への手紙 1章17～23節)**

皆さん、どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな

栄光に輝いているか悟らせてくださるように。また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるように。神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

### 福音朗読 (マタイによる福音書 28章 16~20節)

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

### 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

信徒の皆さんお元気ですか。ついにご昇天の祭日がやってきました。受難の主日から数えて50日ほどになります。典礼的にはこの間にイエスは受難とそして復活を遂げ、弟子たちに何度も現れ、励まし、この世での生活に別れが来たことを弟子たちに表明されました。そして、それから幾世代にもわたって神を愛する人々を守り導くために聖霊を遣わすことを約束されました。そして、皆の見ている前で天に昇っていかれました。

「ガリラヤの人よ、なぜ天を見つめて立っているのか。」と天使は私たちに問いかけます。弟子たちはスーツと上に上がって行かれるイエスを眺めていたに違いありません。聖地にはイエスが天に昇って行かれた場所というものがあり、そこにはイエスの足跡というくぼみのある石があります。誰もそれが本物だとは思っていないでしょうが、ちょっと大きめサイズでした。イエスの足はユダヤの地を北へ南へ東へ西へと方々巡り歩かれ、きつくたびれていたに違いありません。十字架を背負ってのゴルゴタの丘への道ではきつと血が流れて、傷だらけであったに相違ありません。そんなイエスの傷だらけの足の裏を弟子たちはどんな思いで見っていたのでしょうか。

#### 第一朗読（使徒たちの宣教 1章1～11節）

「ルカによる福音」を書いたルカは、その後の弟子たちの宣教の記録を残しました。それが今日読まれた使徒言行録です。これはイエスの伝えた福音がイエスの昇天でもって終わったわけではないことを、知らせるためでありました。イエスはその弟子たちの宣教活動において「いつもともにおられた」とルカは信じていたのです。事実弟子たちの宣教活動においてイエスはその力をもって弟子たちの宣教活動を支えていたのです。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。」と声をかけた天使たちは、私たちにも声をかけています。「イエスはまた・おいでになる」と。

#### 第二朗読（使徒パウロのエフェソの教会への手紙 1章17～23節）

パウロは祈ります。「神を深く知ることができるようにこころのめをひらいてくださいと。」「受け継いだものがどれほど豊かなものか、悟れるようにと」。そして今ある教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場ですと。パウロは私たちの信仰がしっかりとした土台の上に建てられ、いつも神の力によって守られているということを私たちに告げて、勇気づけているのです。

福音朗読 (マタイによる福音書 28章 16~20節)

この場面ではイエスが弟子たちの元を離れて天に昇られたとは書かれていません。しかし他の福音によって、弟子たちの前で天に昇って行かれたことが明らかになっています。 そのことよりもマタイは主の最後の命令を自分の福音書の最後に書きたかったのでしょう。「体は離れても、イエスはいつも私たちとともにおいでになる」ということが私たちにとってどれほど勇気を与えることなのかを、イエスは一番伝えたかったことなのだとマタイは考えていたのでしょう。それはその通り今の私たちにとって最高の励ましの勇気を与えてくださるイエスの永遠の言葉なのです。「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光